

放蕩息子

シリーズ～福音の力～

2020/08/09

ルカによる福音書15章11～32節

また、イエスは言われた。「ある人に息子が二人いた。弟の方が父親に、『お父さん、わたしが頂くことになっている財産の分け前をください』と言った。それで、父親は財産を二人に分けてやった。何日もたたないうちに、下の息子は全部を金に換えて、遠い国に旅立ち、そこで放蕩の限りを尽くして、財産を無駄使いしてしまった。何もかも使い果たしたとき、その地方にひどい飢饉が起こって、彼は食べるにも困り始めた。それで、その地方に住むある人のところに身を寄せたところ、その人は彼を畑にやって豚の世話をさせた。彼は豚の食べるいなご豆を食べてでも腹を満たしたかったが、

食べ物をくれる人はだれもいなかった。そこで、彼は我に返って言った。『父のところでは、あんなに大勢の雇い人に、有り余るほどパンがあるのに、わたしはここで飢え死にしそうだ。ここをたち、父のところに行つて言おう。「お父さん、わたしは天に対しても、またお父さんに対しても罪を犯しました。もう息子と呼ばれる資格はありません。雇い人の一人にしてください」と。』そして、彼はそこをたち、父親のもとに行つた。ところが、まだ遠く離れていたのに、父親は息子を見つけて、憐れに思い、走り寄って首を抱き、接吻した。息子は言った。『お父さん、わたしは天に対しても、またお父さんに対しても罪を犯しました。もう息子と呼ばれる資格はありません。』

しかし、父親は僕たちに言った。『急いでいちばん良い服を持って来て、この子に着せ、手に指輪をはめてやり、足に履物を履かせなさい。それから、肥えた子牛を連れて来て屠りなさい。食べて祝おう。この息子は、死んでいたのに生き返り、いなくなっていたのに見つかったからだ。』そして、祝宴を始めた。

ところで、兄の方は畑にいたが、家の近くに来ると、音楽や踊りのざわめきが聞こえてきた。そこで、僕の一人を呼んで、これはいったい何事かと尋ねた。僕は言った。『弟さんが帰って来られました。無事な姿で迎えたというので、お父上が肥えた子牛を屠られたのです。』兄は怒って家に入ろうとはせず、父親が出て来てなだめた。しかし、兄は父親に言った。『このとおり、

わたしは何年もお父さんに仕えています。言いつけに背いたことは一度もありません。それなのに、わたしが友達と宴会をするために、子山羊一匹すらくれなかったではありませんか。ところが、あなたのあの息子が、娼婦どもと一緒にあなたの身上を食いつぶして帰って来ると、肥えた子牛を屠っておやりになる。』すると、父親は言った。『子よ、お前はいつもわたしと一緒にいる。わたしのものは全部お前のものだ。だが、お前のあの弟は死んでいたのに生き返った。いなくなっていたのに見つかったのだ。祝宴を開いて楽しみ喜ぶのは当たり前ではないか。』」

福音の中の福音

- **ファリサイ派や律法学者の不平に対して**
 - 「この人は罪人たちを迎えて、食事まで一緒にしている」と不平を言いだした。
- **3つの<なくなっって取り戻す>たとえ話**
 - 1匹の羊 (1 / 100)
 - 1枚の銀貨 (1 / 10)
 - 1人の息子 (1 / 2)
- **「放蕩息子」のたとえ話**
 - 最も詳しく、リアルなたとえ話
 - いなくなった弟だけではなく、いなくならなかつた兄まで登場する！

放蕩息子のたとえ話

- 「生前分与」を願い出た弟
 - 田舎暮らしに飽き足りず、半ば強引に父から財産をむしり取る
 - 「全部を金に換えて、遠い国に旅立」つ
- すぐに無一文になる
 - 「放蕩の限りを尽くして、財産を無駄使いして」
 - 「娼婦どもと一緒にあなたの身上を食いつぶし」兄
- 豚飼いに身を落とす
 - 飢饉が起こり食べるのにも困る
 - 豚はユダヤ人にとっては汚れた動物
 - その豚の餌すら食べさせてもらえない

放蕩息子の回心

- 「我に返った」弟

- 父のところでは、…、有り余るほどパンがあるのに、わたしはここで飢え死にしそうだ」

- 悔い改めた弟

- 「お父さん、わたしは天に対しても、またお父さんに対しても罪を犯しました。もう息子と呼ばれる資格はありません。雇い人の一人にしてください」

- 弟の帰りを待ち焦がれていた父

- 「ところが、まだ遠く離れていたのに、父親は息子を見つけて、憐れに思い（スプラグクニゾマイ）、走り寄って首を抱き、接吻した」

大喜びの父

- 無条件で我が子として迎え入れる
 - 「いちばん良い服」「指輪」「履物」> 息子のしるし
 - 一言の叱責も説教もない！
- 大宴会
 - 「肥えた子牛」を屠り、みんなで祝う
 - 「死んでいたのに生き返り、いなくなっていたのに見つかったから」

激怒する兄！

- 畑から帰ってきて、大騒ぎに驚く兄
 - 僕から、弟が帰ってきたので父が宴会を開いていると聞かされる
- 怒ってすねる？兄
 - 「兄は怒って家に入ろうとはせず、父親が出て来てなだめた」
- 品行方正な兄のもっともな訴え
 - 「このとおり、わたしは何年もお父さんに仕えています。言いつけに背いたことは一度もありません」
 - 自分には「子山羊一匹すら」くれなかったのに、父の身上を食い潰した弟のために子牛を屠った！

父の説明

- 兄をないがしろにしている訳ではない
 - 「子よ、お前はいつもわたしと一緒にいる。**わたしのものは全部お前のものだ**」
- 弟の帰還を喜ぶのは当然ではないか
 - 「お前のあの弟は死んでいたのに生き返った。いなくなっていたのに見つかったのだ。祝宴を開いて楽しみ喜ぶのは当たり前ではないか」
- 父にとっては二人とも大切な存在

放蕩息子のたとえ話の解釈

- **弟は悔い改めた罪人**
 - 自分勝手に神の元を離れ、罪にまみれて苦しんだ末に回心した人々
- **兄はまじめなユダヤ人たち**
 - 律法に背くようなことはせず、神の元を離れたわけでもない
 - しかし、嫉妬深く、罪人たちの回心を許せない
- **両者を愛している哀れみ深い父なる神**
 - 罪人の回心を一日千秋の思いで待っている
 - ユダヤ人たちには父なる神の思いを理解し、「ともに喜んで」欲しい

3のたとえ話の共通点と相違点

- **共通点**

- 大切な何かを失う(見失う・無くす・行方不明)
- 手元に戻ってくる(見つける・帰ってくる)
- みんなを集めて大喜びする

- **相違点**

- 見失う<>出て行く
- 発見する<>回心して帰ってくる
- 捜し回る<>待ち続ける
- いなくならなかつた兄

我が子が我が子でいることこそ神の喜び

日本人は「兄」に近いのでは？

- **品行方正**

- 何か大きな罪を犯したわけではない
- 改心しなければならないようなこともない

- **飢餓状態にない**

- 食べるのに困ることはない

- **他人と比べて羨ましがっている**

- 「なんで自分だけ？」

- **そんな日本人も父なる神にとってはかけがえのない存在！**

- この父の子であることを認めよう！